



1278
58



1278
38

朝夷巡島記全傳第八編卷之三

東都 松亭金水編次



續輯第十五

草菴の奇遇源家の族
道人無為の教と説く

吉見の冠者義邦よしみのかぶねりよしかかの夢む昇あ誘いはまて枝折戸えだをりとうちち園い入りいているいふいふい若僧わかしゅがまう此方こなたへと案内あんないとあすあるあをあ傍わるわ方かたまをまるまのの菴あまのの行ゆきゆ入いりいるいるい竹たけと編あむあ部ぶととると。茅かやととりと家根やねととると。畧りやくははるはてて簞たねのの破やままててはははは敷しき列りよくねね四壁しへきああけけままのの吹ふきき入いるい。風かぜええぞぞ此これれはは小このの湯ゆとと汲ひてて別わかれれのの山やま路ぢわわのの舊ふるくくるる権ごん子しのの湯ゆのの沸わききままるる若僧わかしゅははままるるそのその湯ゆとと汲ひてて別わかれれのの山やま路ぢわわのの怨うらみみをを困こららししめめひひけけりり。咽のどとと濕うるししめめひひねねとと薦すむむるるもも歡よろこぶぶ。冠かぶ者もののの故ゆのの乾かわけけるるままるる温湯ぬるゆゆのの甘露あま露らのの如ごとくく小このの湯ゆとと三さん三さん枕まくらとと喫くむむ。彼あ若僧わかしゅのの

朝夷巡島記全傳第八編卷之三

二〇二

對ひてし。尚下在下の誘ひ。この菴の主ある。名の夢葺。うらひ
 すと。躬跡をひてり。然るも奈何なる人の莖と遊べ。不みひ
 澄と居る。ちと貴くき。道とあべ。初てこと。昔の人の
 ひ。今更思ひ。菴の年老。世の甘辛
 意満く火のち。扱と厭ひ。世と遊。性古。あ
 足下。三十の程。俱。浮世と悟。られ
 有。善智。坐す。と。北叟。宣。負
 若年。才。純。出。難。生死の理。争。悟。要。葺。在。俗の
 主人。幼少。恩。遇。渥。殊。他。多。寤。被。主人。入。不。あ
 吾。伴。先。頃。世。道。眠。近。の。士。多。り。と。と
 技。吾。の。如。此。思。ふ。宜。ふ。よ。心。決。る。假。令。野。小。あ

山。下。在。下。の。伴。ひ。人。思。ふ。心。と。青。て。仕。ま。ら。ん。の。ひ。け。ま。あ
 赤。心。の。平。生。を。故。小。汝。の。小。告。ふ。然。れ。吾。と。共。未。よ。主。從。子。忍。意
 び。種。の。艱。苦。あ。ら。ま。操。と。易。さ。る。れ。首。と。刺。徒。弟。と。あり。今。日。ま
 傳。副。の。語。の。冠。者。の。心。小。默。然。の。夢。葺。の。廣。細。あ。ら。若。僧。を
 加。世。丸。の。顔。と。餘。汗。多。う。後。の。と。向。て。人。を。思。ふ。り
 外。面。より。要。葺。の。徐。と。未。り。客。人。然。と。待。任。の。め。今。師。の。許。へ。性
 師。の。曉。の。勤。行。あり。雲。時。其。処。小。待。る。あり。の。ひ。の。行。者。が。對。ひ
 坐。して。足。下。と。在。下。の。道。ま。あ。る。身。多。う。小。折。り。と。相。見。す。の
 初。見。奉。の。武。士。の。道。の。愧。ま。と。ま。奇。遇。と。在。下。源。夜
 頼。政。の。孫。の。武。花。の。太。田。小。世。と。遊。る。多。田。前。司。廣。綱。の。陸。奥。の。賤。の。經。仕。退
 治。せ。の。台。命。あり。則。養。子。光。仲。と。大。將。軍。が。在。下。の。副。將。と。と。奥。小。下。を。

鎮守府不在城と合戦の動静を窺ひ小賊徒滅びて塔光仲凱陣と云ふ
 及び在下元末道世の志の頻りあることと人の女児を遺て世を棄てて
 憶らざりた光仲と塔とあるは浮世不要の暴おさるが心も童よは侍
 近く不攸の者不百あまらる。加世丸に伴ひて人をも城と出小菴ふて頭と
 さる所と遍歴する上野ある榛名の山も憶りも異人ふりその名を
 問乾坤道人も太極無形道人より曾て日本の隈々小到らざる所あり
 志願と果さる止むと勇猛小勤行は世の容とるは
 その比は俗情の失やするに折あり。師と王家とも興さんと思ふ念慮
 ありと年と果れ日と積て漸く老荘の玄を悟り。全く塵世と離るより
 世間の治乱得失をひて面とる人の吉凶禍福を悉く掌と指とる
 まこと火宅と厭ひ果る。和主世を遊んで去るの域不入らして

姿と更なるもの。眞の道と知れ。俗中の桑門も道と
 といふべし。倘道と果んとあ。吾も修修行せよ。半半も自然の
 所ありん。説極めて理あり。道人も随從て及。究む
 小人間世の景勢の浮ゆる雲も異あり。今その漸と困るる
 ねとも。藝成厭ふる。然るも尚ふり。道人の足下小行と道
 と固縁ある者あり。危難のありんと頼心と用ひらるる。元人
 神技妙算雲と叫び風と起。鬼神と役使することあり。自ら
 の眞偽と決らぬ。疾の道人も譚とる。今躬名掲とる。少く
 語るも義邦の始より。然るも推せし。今躬名掲とる。少く
 遊と額著。俵の廣網大入り。宜く経任滅び凱旋の。大人
 首のち遺て。世と道と。光仲の。朝夷義未その

徳士かゝるうす在下すも心と痛め手と頰へは性方と探せり。と。聊の手
 掛りの夫より後の東西の疆を知られぬ。秋くさうて詮方あり。夫より花
 人光仲あひ下下。容不豫倉へあり。処箇様との厄難ありて。脱不豫
 鯛せり。義秀が朋友の信をて扶け。一伍一什の長物徳が。くとも
 彼の光仲と始り吾形の人細く不結り。初て在下の武苑あり。石戸の莊
 と充行いと近曾入部せ。処如世ありと今日。あつたを物。くとも。度徳
 の父果て。吾その初より山野の家。人の交を。あつた。空く。風の夜も。
 夫等とあるとあり。し。師の乾坤。人いぬ。何あり。長を。將軍家の暗
 弱あり。ま。北條家の佞邪。脱不及。び。結り。あひ。今足
 下の物語と。一点も差。い。合。師の。室。出。箇計りの。知。
 ま。実。當世の神仙。と。足下。の。災害。と。未。然。不。知。と。あ。

ま。毫髪も。差。い。あ。つ。た。頃。見。泰。し。の。後。の。も。回。と。義。邦。と
 誘ひ。と。ち。出。る。の。内。を。白。と。明。り。と。夢。登。昇。が。案。内。の。情。多
 番。の。ち。徐。と。出。の。乾。坤。人。と。道。服。の。の。纏。ひ。も
 一。條。の。杖。と。推。え。鶴。後。の。白。銀。の。計。の。実。不。寿。の。百。歳。の。花。を
 う。と。童。顔。と。その。容。貌。怒。麗。多。り。冠。者。の。貴。と。拜。せ。と
 ま。その。捕。へ。ま。上。率。不。居。の。道。人。未。坐。不。行。と。做。り。在。下。の。君。の
 父。浦。殿。の。内。の。三。の。者。と。當。麻。太。郎。が。弟。と。在。俗。の。名。當
 麻。瑳。次。郎。房。光。と。ま。の。脱。不。故。殿。北。條。等。が。好。殊。の。塊。と。寛。く
 被。り。の。兄。と。太。郎。の。不。虚。実。と。明。と。俱。不。傷。と。經。り
 營。中。の。床。小。忍。心。便。宜。と。寂。不。江。間。義。時。の。人。と。脱。不。殊。と
 稟。い。下。の。局。住。と。の。幸。い。と。免。れ。浦。殿

伊豆の修禪寺小藝居とありて故郷と迷ひ出熟世間と観ぶ人の
 禍福榮辱の善惡の東不ありて時の幸不幸の...
 名揚家と興との志の福...
 の若行を道と修す...
 東を胸中小粗惑ひ...
 二千餘年今漸く六通...
 及びいよく聖世火宅...
 優婆塞が比ひ...
 勝地小托びて无為...
 四海の无多と...
 小勝り既小主家...
 神佛儒及小偏らず...
 乾坤とて家...
 山川とて...
 平土の濱猶王...
 頃北條氏日未...
 故小君の蒲殿...
 正平嫡子

りて忘ちりて蛇蝎の如く事あり假託て...
 篤実を幸の名とする...
 邑とありて一連枝の好...
 なる。こも尾渠が...
 以て中を失ひ北條氏...
 跡の子あり董次秋...
 回竹塚とて人...
 晴明も越の國の大...
 資財とて其へて...
 不憚と五輪と...
 小その邪術の爲...
 吾とありて疾...
 既小後念不在



〇七



一睡の間は義邦
 歡樂と極む

よ邦

あまた君のその奸謀不器と云ふ人あり。嗚呼危うなる路い
 る今不佞が初不隨ひ云爲の境畏不入り。至身不於て天年と保ち
 且子孫連綿とせん。然るに恩愛と名利不羈を俗を不棄りあふ。一
 命其不縮まり。子孫断絶々祖先の犯り。永く絶んと必せり。不佞粗末
 然と云ふ。かまうせども凡心多し。更不信用あり。故うん。その説く所理
 大くはあやうあり。実あはれまことと信せん。然れども。這回の阮雅宮小
 四郎が修道院と圖すに階まんとす。そまはるは多し。知りぬを布衣
 ありて是と識り。並松とて遊走り。現不神仙の施る。す。これ
 為まへ。かま奇特のありと思へ。後来のとも誣べう。如何ありん。肚腹不
 條の糸の纏まり。更不その解ゆを。默然とて居り。一が侍る。夢
 算不羽い。今先醒の論。も。天小感心あり。の。在下ま。試ふ。人。と

言ひ。人との世のあり。妻子従類と思ふ。故の。然る。一
 至と辭て。云爲の域不入り。妻子従類の款とて。人。これ。ま
 雅。然れども。傳へ。悉陀太子妻子と棄て。壇特山不入り。公昔
 一と成道。い。そ。衆生と濟度の。未代法祖と。これ。僅小
 身と易く。返る。更不世。益。武門。生。者。馬
 家の。綽。の。命。と。忘。妻。子。と。忘。て。征。天下。を。と
 清。う。宸。襟。と。休。め。奉。り。志。と。ひ。と。の。丞。相。太。保。の。職。と。授。ま。る。名。成
 挙げ。祖。先。と。輝。う。す。と。ま。忠。孝。全。く。の。若。志。と。得。る。と。寒。心
 潜。こ。り。一。網。と。終。る。ま。の。と。人。奸。謀。の。徒。あり。と。吾。と。獨。と。信。ん
 行。ひ。と。正。を。せ。何。の。忍。ぶ。あ。う。ん。と。存。ぶ。如。何。不。や。行。ひ。人。の。積
 論。の。法。律。の。い。ね。の。ひ。け。と。夢。算。の。足。下。が。初。極。め。て。論。の。

箱のうちに。栗辨とど難へ。穀物と把か。加世九法師も分た。炊くとの回小道人の夢養と伴ひ何すの行と修をとして一回の程あるけ。冠者へ。一個ふり。言葉敵あ。精不渾心の方と。吾もあ。回睡り。加世九法師を。彼も。余と持出行者。脊ふらち著。冠者へ。時。回小熟睡せ。一响をり。過ぎ。疾熱せう。快小眠。揺起さん。得。加世九法師の曲突の傍小書お。披。其折。冠者の暴小言と揚。嗟苦。叫び。眼と。冠者と看。心地の悪。同。復歎息。加世九

法師の膝を進め。物小魔り。修道院。邪術。辛。さ。心小深。夢。一期の歡樂栄曜。水上の泡。奮の。粗悟。一期の歡樂栄曜。水。朝露の果敢。歎息。加世九法師。開。夢。若。頓。歎息。加世九法師。炊。進。冠者の法師。一。味。畢。物語。長。吐。傍。身。傍。

續輯第十六 耶那草菴の夢語 石戸の旅寓家族の歎き

とも般若の銘文あり。如夢幻泡影と説きて夢の果敢多かりの事なり。然れ
 ども上代の夢と以て懲とせし。和漢の類纂多し。凡そ就不應神の聖
 主たる夢とて空祚と定めあり。太宗の魏徵南帝の捕らふ夢
 のよき祥とてその所被擧不違あり。當時平尼の臺也。妹の夢と購ひて
 終不幕府の臺とあり。あつても物ありとせり。さて同話休頼吉見の符
 者義邦に加世凡法師あり。對ひ筒不吾勞とせり。不問睡ともな熟
 睡しぬるが寝たりとらふ身不勞とせん。昨夜辛き目不遭しとる。漸く
 石戸不歸り。妻と始りし解の人あり。在り客と物語り或ひん殆と或は怖れ
 せし。恙あるを祝し祝さし。明し暮とて二旬あり。一日に不農人等
 奔走して後念より。白田山刀称安達刀称。その所刀称原成改とる。装いと
 花々を。使下向のより。計らひまうさん。憶あけとる。

後けと緯急あり。何と准依とせり。同のあり。農民の安内あり。伴の
 諸士等威儀といふ。宮小四郎が家小未り。客の回小居流とる。尼は臺の
 命と直示吉見刀称。小言とせり。とあり。下向せり。頓不拜謁とる。その
 主と更不分とて。粹とせり。あつても。彼等不相見する。各未坐。不平
 多し。這回將軍頼家卿あり。とる。妹叛と企あり。小家と礼さん。伊豆
 の修禪寺に幽閉あり。あつて生室と勧めあり。せし。才実朝卿の家跡と嗣あり
 不右大臣拜賀の夜。公曉の爲不弒せし。今の幕府の血脉絶なり。周尼は
 臺の命あり。君と正とる。故右幕府の。甥と渡らせり。頓後念不度。伊
 あり。四代の將軍不立せり。故小臣とて。差紙とる。本不君。迷ひ
 容あり。自化の歡ひの事あり。天下の僥倖とて。奉とる。額とる。花
 日小異あり。然とて。无智短才あり。争う後念の主とあり。と。再三辞とる。更不

許^{ちか}こ^ぶと^ち秩^ふ父^あ重^し忠^ち進^{しん}之^し出^し今^{いま}暴^{はく}か^かく^ます^せ六^む猜^{がい}疑^ぎの^の糸^{いと}を^をる^るま^ま今^{いま}
 ま^まじ^じさ^さや^やく^く脱^{だつ}不^ふ右^う幕^{まく}府^ふの^の血^ち脈^{みやく}を^を不^ふ於^おて^て絶^たえ^え今^{いま}予^よ因^よて^て君^{きみ}を^を薦^{すす}む^む不^ふ且^し匡^{きやう}
 媛^{ひめ}の^の故^こ伊^い豫^よ守^{しゆ}義^ぎ経^{けい}君^{きみ}の^の女^{むすめ}兒^こ旁^{はたはた}必^{かならず}て^て君^{きみ}の^の他^{ほか}不^ふ誰^{たれ}う^う嗣^し君^{きみ}あ^ある^るの^のあ^あん
 辞^{ことば}を^をあ^あら^らふ^ふ頃^{とき}と^と薦^{すす}む^む不^ふぞ^ぞ今^{いま}の^の辞^{ことば}を^をさ^さす^す初^{はつ}め^めあ^ある^る然^{しか}ら^らに^に後^{あと}
 余^{あま}に^に到^{いた}り^りたる^た疾^はより^{より}京^{きやう}師^しへ^への^のま^ま奏^{そう}し^し侍^しに^にあ^あり^りたる^た程^{ほど}を^をく^く勅^{ちやく}使^し下^げ向^{むか}
 あり^りて^て征^{せい}夷^い将^{しやう}軍^{ぐん}の^の宜^{よろ}下^げあり^り匡^{きやう}媛^{ひめ}も^も三^{さん}位^い不^ふ叙^{しよ}せ^せと^と昨^{きのう}日^ひの^の辛^{しん}苦^く合^あ旨^しの^の采^{さい}
 花^{はな}を^を掌^て成^{じやう}返^{げん}さ^さす^すが^がぬ^ぬく^く一^{いつ}朝^{あさ}不^ふ志^しを^を得^えて^て上^うる^るた^た形^{かたち}と^とあ^あり^りけ^けと^とも^も狂^{くる}む^むじ
 真^{まこと}愛^{あい}う^うじ^じめ^めと^と忘^{わす}れ^れさ^さす^すに^に怪^{あや}む^むと^と猜^{あや}む^むと^と省^{しやう}さ^さ且^{かつ}暮^{くれ}不^ふ民^{みん}の^の艱^{えん}苦^くを^を恤^{あは}む^む不^ふと
 不^ふ世^よの^の賢^{けん}君^{きみ}と^と教^{おし}ひ^ひ貴^きと^と四^し海^{かい}の^のよ^よく^く奉^{ほう}平^{へい}あ^あて^て万^{まん}々^ざの^のめ^めく^くあ^あり^りそ^その^の酒^{しゆ}
 たる^た者^{もの}水^{みづ}と^と茶^{ちや}め^め水^{みづ}不^ふ飽^あが^が湯^ゆを^を思^{おも}ひ^ひ湯^ゆ不^ふ飽^あと^と酒^{しゆ}を^を思^{おも}ふ^ふこ^この^の人^{ひと}怒^{いか}れ
 慣^なひ^ひあ^あて^て脱^{だつ}不^ふ志^しを^を得^える^る不^ふ及^{およ}び^び何^{なに}れ^れと^とあ^ある^る心^{こころ}弛^{ゆる}む^む所^{ところ}の^の将^{しやう}軍^{ぐん}の^の重^{じゆう}責^{せき}を^を不^ふ辱^{じやく}り

箇^こ斗^との^の樂^{がく}と^と苦^くと^と折^をり^りの^の酒^{しゆ}宴^{えん}を^を殺^{ころ}し^し嬌^{せう}嬈^{りやう}あ^ある^る美^び女^{にょ}と^とは^はん
 舞^{まひ}唄^{うた}の^の粗^{あら}拙^{せつ}と^とあ^あり^りけ^ける^るそ^その^の舞^{まひ}妓^ぎの^の桂^{けい}と^とい^いふ^ふ年^{とし}の^の以^も十八^{じゅうはち}九^く不^ふ
 老^{らう}て^て嬋^{せん}娟^{けん}と^と兩^{りやう}愁^{しゆ}の^の翼^{つばさ}不^ふ殊^{しゆ}あ^ある^る眉^{まゆ}の^の遠^{とほ}山^{さん}不^ふ没^{ぼつ}ん^んと^と膚^かの^の
 教^{おし}と^と摸^も丹^{たん}花^かの^の唇^{くちびる}芙^ふ蓉^{じやう}の^の眸^{めい}肌^{はだ}の^の拭^{ぬぐ}の^の雪^{ゆき}よ^よう^う白^{しろ}く^く姿^{すがた}の^の凡^{ふん}不^ふ靡^びく
 岸^{かた}の^の柳^{やなぎ}の^のう^うの^のと^と人^{ひと}を^をう^うり^りの^の美^み女^{にょ}あ^ある^る何^{なに}れ^れと^とあ^ある^る心^{こころ}と^と願^{ねが}ひ^ひ最^{さい}老^{らう}
 の^の妾^{めかけ}と^とあ^ある^る程^{ほど}を^をあ^あり^り子^こと^と産^うま^ます^すま^まの^の催^{もよお}し^し不^ふ夫^ふより^{より}後^{あと}救^{きう}多^たの^の見^みさ^さ産^う
 ぬ^ぬま^まの^の營^{えい}中^{ちゆう}自^{みづか}然^{ぜん}振^びひ^ひて^てま^まの^の身^み年^{とし}の^の春^{はる}と^と遙^{とほ}ひ^ひ千^{せん}歳^{ざい}の^の秋^{あき}を^を唱^なへ^へて^て覺^{おぼ}
 え^えば^ば三^{さん}十^{じゅう}年^{ねん}を^を経^へる^る不^ふ子^こ等^らの^の各^{おの}成^{せい}長^{ちやう}と^と或^{ある}ひ^ひの^の妻^{つま}を^を迎^{むか}へ^へ臣^{しん}下^げ不^ふ列^{れつ}
 その^{その}子^こを^をの^の孫^{まご}次^し弟^{てい}不^ふ戀^こひ^ひす^すま^まの^の救^{きう}多^たの^の星^{せい}霜^{じやう}と^と経^へる^る眞^{まこと}ふ^ふれ^れの^の最^{さい}初^{はつ}也^{なり}
 あ^あら^らと^と五^ご十^{じゅう}年^{ねん}不^ふあ^あり^り吾^{われ}歳^{さい}も^もや^や八^{はち}十^{じゅう}不^ふ近^{ちか}す^すま^まの^の容^{よう}貌^{ぼう}更^{さら}ふ
 昔^{むかし}の^の容^{よう}貌^{ぼう}不^ふ変^へら^らず^ず所^{ところ}の^の身^みも^もま^まと^と健^{たけ}ま^まり^り加^か旃^{せん}匡^{きやう}媛^{ひめ}も^も桂^{けい}の^のま^まと^とあ^あら^らと^と

月夜八編 卷之三

然も小町が面げの多らそ年の積まうと御さりて今更不疑をり
 也ろろ熟かりふ彭祖が寿八百歳の鳩の期あり千年の松のつらねる
 願うら老び死むの業あふ索めんこと至て凡俗の情態と現しつ索
 めんとする小容易うず。ふ一人の道士ありその名を徐伯とるる吾
 茶と索むつと笑その法と授けんといふ吾拓さること同小兩室小伴ひ
 人と遊て君の貴さあん所あてことと索むつといふと容易し然れども
 味得た口品のゆあり。この君が日未より最愛の女子と殺しその生血を
 雑ゆを妻妾小限するといふ吾は二人の妾と殺すを難さふあはれど
 ことを為の不仁あるんといまご心と決せど然る小桂のありをゆは
 岡知りん心の中を憂へ。最忠の妾といふまづ第一小の所之謀計とりて
 この災害と遊んあはれ若ううんといふ巴が年未月とわら。女子ども小分付て能

媛のこの程より。権臣北條義時と密をなすあはれ女とのこらるる桂を嫉
 こを殺さんといふことと密と流云とせらるるを。何れとなく吾耳小入り。於
 て真しうと秘との七人の見の産れといふ女小心弛する。昔の人ゆするを
 偽りふの計らまんと思ふ小秘て箇が容と所所るる窺ふ小怪しとさふ
 風情もあり。儲へと嫌疑と生さるより。行その容の怪元さふ同は全偽
 あはれと見より渠と味めども証扱とるる所ありねい。さあま小返けるが一夜
 桂ハ吾固小建一屏風の外小居る。泣然と泣声は吾行りて何れ心の心小
 惚れぬとありてかゝるる憂へといふぞと問ど始りい言ざりしを強て問はて涙と
 ちひいと小賤ちくつる所ありあはれ世の果報ありて是目本小二人といふは
 貴人ふおららそとの年月小ゆさく救多る所あり。鬼の毛小おるる
 心小惚れぬと信るる。帝悲しといひ信おける由今宵限りといふ人ハ限ら



世態を説く
乾坤道人
義邦を誘ふ



けん道

むら法師

加世丸法師

國家と喪ひぬと滅ぶに至る。初め不障の善ふより。後大障の悪と致す。
 と天の止觀の要文也。その心とらるるは古今の人情の弊と免るるを
 一とて下。然るに初めより可申あらず不可申るれと申す世間の安ら
 ぬ不昇俗の常言不申。无事とて貴人とり入るるを。凡そ始めあれば終り。
 昼夜長短も毎小消息のるれと能はず。固く吾輩の修むる所。云ふとて
 樂とて。美為一時的の榮ふ誇りて。後の悲とて俟べらんと諭さして行者の
 点改ひ。邯鄲の旅寓も五十年の榮枯と曉る。盧生が故より彷彿あり。
 實一期の歡樂の二朝の露の如し。在下篤と思惟して。今より先醒の徒
 身とあり。夢覺老人と諸共不世と避んとする。許容しめり大空の
 とらふ道人も歡びて。傾て行者するの戒と授けり。と教へて。家不ぬれ
 念と断志む。安下某生再説らば波宮小四郎父子の者あり。馬の標吉

郎の林原不弛ゆる。果て鹿のあり。この屈竟の獲物と大不
 歡び逐逐めぐる。刺さると二三匹。今日の生憎不獵み。と空をうせん
 去さる薄暮不及び思ひかけぬ。獲物あり。と珍重する。と傾て列卒も
 擔ひせ。うちとんとす。時不風雨頻り不起りけ。各兩具の準備する。れ
 ぬ。心急ぐ。馬不鞭あて弛出。とさう。筒標吉郎の主不きて在る
 が。右不左不心不か。鹿の出る不獵ん。とせず。彼方と顧む。心ふ。と後
 所不農民們兩三個喘。走り来て。標吉郎が傍不近づき。刀称も。是は
 らせぬ。心あてあり。並松と。小狗が。隠し。月あ。お流さ。不便と思
 えて。その往方と。んと。彼方へ。弛ゆる。困る。君達。が。俟る。んと。下僕們。と。此と
 知。せ。ま。あ。は。の。中。の。程。多。く。刀。称。も。の。所。へ。来。り。ら。ん。と。の。ひ。り。と。の。標。吉。郎。の
 点。び。て。然。ら。ば。暫。く。ら。あ。て。俟。ん。と。い。ひ。樹。蔭。不。馬。ひ。と。廻。ら。し。雲。内。甜。て。あ。り

ける所不曇王の空の猶暗く大風さ吹出て雨の車油と流をさうり不降木
 不けまの標吉郎もく不得はを違ふ。此方白亭のあつてつけれ
 軒下不屈をいへる弘義父子の者その他列卒もこの雨風も散
 とあり果て眼不遮る所一人一個のあつて。殊不日さ日暮果て物の善
 悪も分がさこの雨のましく頻あり。冠者の何とて初遅さこの雨風不障ら
 きて困下果つ在さうんと心も舌不あねども。その路と入辨へん今まを爰
 不集ひる。雑人等もて何方へ。隠ひその按内と。さまをさるあふされが
 心頻不焦燥の。更不その淋と知らず。ま遠近の入り間へ不居と冠
 者ダ便宜と俟とつて日暮て。その憑と失ふへ。独語て白亭と祝
 さつてうらふ五十修りの老媪二個糸縁居る。標吉郎の声をけ。吾の如此の老
 ある急雨不遭て難哉。且く不宿とんや。とて老媪のちあがり。さつて

辛のあつて。未末と此方へらせり。巾着と板敷と掃きとて歡ぶを
 標吉郎の尻うち掛て。糸把を濡る所を拭いて。温湯と飲。思ひひら
 ぬ暴雨殊不風さ強けま辛。果て不憶。阮介もあつて。又老媪の回答
 らの郷不久。頃主の在さうと。頃吉見さる。願をせり。及ぶ。その
 内の方。今より永く。恩も。被る。吾の。阮介と。先
 緩と雨風の止む間と。舌不俟。人の。荒屋の。進ら。物
 あり。背戸の。柴栗。二箇。三箇。法と。焼て。せんと。筐の。裡より。出。標吉の
 手を。奉て。心る。遣ひ。腹より。你が。如く。昨今。刀称の。入部。あり。土地の。業
 内の。今。今日。武人の。勧め。持念。せ。刀称。と。我。の。川。の。事
 其の。性方。と。定。ふ。せ。故。不。此。処。不。呻。吟。あり。是。より。東。辰。巳。の方。不。隠。川。の
 知。る。あ。ん。その。川。を。越。て。水。下。の。何。と。の。所。あ。り。ま。か。子。の。道。程。う。知。り。て。あ。る。は

吾們が禍ひの縮まりと嘆き頓て小四郎ふち對ひてあん所をいふ
 古く住む土地の按内いよくあつらん今より馬飼標吉とめて冠者が被方
 索わぬ持ねと坐て弘義その子童次秋弘自口と拵へその作せぬ及ぶべし
 然るが今夜陰とらひ殊ふ凡雨の烈くて炬火ぞ不滅さるる只呻吟の
 詮方あらん東雲をむかひて人殺と引俱しは性方と索ねん易う
 へ馬飼ぬ不語する老媪ハ何の恐怖かいぞ知らねどもこの郷お然る
 るどの有べらうの両方辛くあんとあん所不恙あるとみの鏡ふかけて
 如しは心易く思せよと笹媛と慰めてす夜ハ俱不寝もや子曉と俟に

けり 村田

朝夷巡島記全傳第八編卷之三終

